



寒空に耐えて頑張っているように見えた桜の木も、多くのつぼみをつけて、春を迎える準備をしているようです。学校生活においても、それぞれの生徒が様々な不安や悩みを抱え、迷い、でも自分を奮い立たせて新学年に向かってすすんでいこうとしています。皆さんの気持ちに寄り添った相談や支援ができたかどうか、考えながらこの一年を振り返ると、「ああすれば良かった」「こうすべきだった」と「すべきだったこと」ばかり思い浮かびます。そんな思いを救ってくれるのは、やはり生徒の皆さんがもっている自己実現していこうとする力のようなのです。相談室を利用する、しないに関わらず、忙しい学校生活を送りながら確かにそれぞれが成長しているようです。桜の花が開くのを待つように、「果報は寝て待て」方式で「信じて待つ」のもいいかもしれない、と自分を励ます年度末です。この相談課だよりも、成長を見守る相談課員のエッセイを掲載してきました。「この先生こんな一面もあるんだ。」という小さな気づきが、自分自身への肯定的な気づきになり、成長のエネルギーにつながることを願っています。

人生を楽しもう！～ たくさんの出会いや体験が人生の「肥やし」～

山下 知子

中学・高校生の頃、「私はこれが好きだから、こんなことが得意だから、将来こんなことをしたい！」と、言い切れる人ってどれくらいいるのだろうか???中には魅力的な大人の姿を見て、「自分もこんな風になりたい！」と思って自分の進む道を決める人もいるだろう。でも、「将来何がやりたいのか分からない。」「何が好きなかわからん。」「何も面白くない。」と思っている人もいると思う。自分自身の当時を振り返ってみても、世の中のことがそれほど分かっている訳でもなく、いわゆる知識も経験もまだまだ不足している状態の中、自分の興味・関心・適性等をそれなりに考えて進路を決めていったように思う。大人になってから、「こんな仕事も面白かったかも・・・。」と、思うこともあったが、今の仕事も楽しくやりがいのある仕事なので転職しようと思うことはなかった。

大人になってから生活の基盤を大きく変えることは、とても大きなエネルギーが必要となるので簡単にできることではないが、その気にさえなればできないことではない。20代後半や30代になってからでも勉強をやり直し、それまでとは全く違う仕事に就いている人も

いる。人生は思い通りになることばかりではないが、その時々でできることを一生懸命頑張っていくことで充実した日々を送ることができる。私自身も共働きで忙しい毎日だが、休みの日には気分転換にあちらこちらへと出歩き、結構楽しく過ごしている。それも家族が皆、元気でいてくれるおかげであると神様に感謝している。

また、人生には大きな節目となるような出来事や自分の人生を変えるほどの人との出会いが巡ってくることもある。ただし、素敵な人との出会いがあってもすれ違ってしまう時もあるし、一見苦しくてピンチと思えるような出来事でも、自分次第でチャンスに変えられることもたくさんある。チャンスが訪れた時に上手くキャッチできるかどうかはあなた次第。時にはその選択が人生を左右するほどの違いになることもある。いずれにせよ、たくさんの人との出会いや経験が自分の人生を豊かにしてくれる。朝日高校での3年間は、苦しくてしんどいこともたくさんあるかもしれないが、他校では味わえない素晴らしい出会いや経験がたくさん得られる3年間だと思う。どうすれば良いかが分からなくても、“一期一会”の出会いを大切にしながら、自分と向き合い、とりあえず今できることに一生懸命取り組み、前に進むことが大事である。良いことばかりでなく、時にはほろ苦い、辛い、苦しい体験も自分の人生の「肥やし」となる。少しでも興味・関心をもったことにはチャレンジしてみることをお勧めする。合わなければやめたら良いのだから。そうした体験を重ねることで自分の世界は広がり、本当に自分が好きなことややりたいことが見えてくるのだと思う。

自分が楽しいと思えることや心地よいと感じることを大切にしながら、自分らしく、楽しくね！



素敵なおトク

中田 利夫

3月上旬、北京パラリンピックが開催されました。連日、ハイレベルなパフォーマンスや心打たれるコメントが報道され、そのたびに元気をもらいました。多くの素晴らしいパラアスリートの中で、特に注目していたのはクロスカントリースキーの新田佳浩選手です。彼は言わずと知れたパラスポーツ界のレジェンドです。また、彼が岡山県の西粟倉村出身であることも周知の通りです。少し個人的な話になりますが、私は二十代の頃、美作市(旧英田郡美作町)にある林野高校に勤めていました。林野高校は新田選手の母校です。私が転勤で林野高校を去るのと入れ替わりで彼が林野高校に入学したので、直接の関わりはありませんが、単なる林野つながりで一方的に応援しています。当時林野高校に勤めていた何人かの先生方とは、転勤後も親交があり、度々新田選手(当時は皆「新田君」と呼んでいましたが)が話題に上がりました。そのときはいつも彼の真面目な人間性やストイックさを感じられるエピソードを聞かせてもらえました。(確認が取れていない話も多いので詳細な紹介は控えます。)彼に直接声をかけて応援することはできませんでしたが、転勤後も彼の活躍には注目してい

ました。ですから、彼が高校2年の時に長野パラリンピック出場を決め、入賞を果たした時はとてもうれしかったです。

新田選手は大学生や社会人になっても、世界を股に、めざましく活躍しました。彼は二十年以上の間、第一線で戦い続け、その戦績もバンクーバーと平昌パラリンピックの金メダルを筆頭に超一流です。加えて、二十六歳の若さでパラノルディックチームのリーダーを任せられ、述べ十五年間の長きにわたり、チームだけでなくパラスポーツ界を支え続けています。前回の平昌パラリンピックで引退を考えたようですが、現役続行を決断し現在に至ります。個人的な分析にはなりますが、平昌で金メダルを獲得し、もっと勝負したいというモチベーションが生まれたのは大きな要因だと思いますが、自身の後継者として安心してリーダーを任せられる人が、まだ育っていなかったことも、彼を現役に踏みとどまらせた要因だったのではないかと考えています。けがや体力的な衰えなどから、競技生活を安易に継続するのは難しい状況だったと思います。それでも、パラスポーツ界全体のことを思い、個人的な区切りよりも、後輩に残せるものをすべて残し引き継いでもらおうと判断し、現役続行に踏み切ったのだと考えています。

新田選手は7回目のパラリンピックに臨みましたが、残念ながらメダルには届きませんでした。金メダルを獲得したのは後輩の川除大輝選手でした。川除選手は新田選手から次のリーダーに指名されている選手です。新田選手と川除選手の出会いは今から十年以上前に遡ります。当時小学生でサッカーとスキーの両方に取り組んでいた川除選手は、新田選手にバンクーバーの金メダルをかけてもらい、スキー専念の誘いを受けました。その後、中学生で参加したワールドカップで、他国の選手と互角に渡り合う新田選手の圧倒的パフォーマンスに衝撃を受けました。それからはずっと新田選手を師として仰ぎ、その背中を追いかけるように競技を続けて来ました。新田選手は後輩にあまり手取り足取りアドバイスをしないそうです。おそらく、川除選手は新田選手の行動や発する数少ない言葉から学び、自身で考えることを繰り返すことで、競技力や人間性を高めてきたのでしょう。最近の世界大会では、新田選手よりも上位に食い込む程力をつけ、今では新田選手のことを「師匠」であり「ライバル」と公言しています。

別れと出会いが交錯し、いろいろなバトンが渡される春だからでしょうか、あるいは先日感動的な卒業式に参列したからでしょうか、北京パラリンピックで金メダルを獲得した後、川除選手が語った「安心してもらえると思う」というフレーズがとても印象に残っています。リーダーとしての自覚と自信が芽生えた弟子が、しっかりとバトンを受け取った瞬間を感じ取り、胸が熱くなりました。今後はそれぞれが違った立場でパラスポーツを支えていくことになると思いますが、二人のさらなる活躍を願ってやみません。



「エモい」を見つける

安藤 七彩

いつの間にか浸透している「エモい」という若者言葉。高校生のみなさんなら、何となく言葉のニュアンスが分かるのではないのでしょうか。私の二つ下の妹も、何かあれば「エモ〜！」と、はしゃいでいます。多様な使い方ができ便利な言葉ですが、様々な表現をひとまとめにした印象もあり、語彙力・言語化能力を自ら衰退させてしまうのでは？という声もあるようです。そもそも「エモい」とはどういう意味なのでしょう。

「エモい」という言葉が生まれた背景には、二つの説があるようです。一つは「Emo(イーモウ)」という音楽ジャンルが元になったというもの。「Emo」の語源は「感情的、情緒的」を表す、emotional です。もう一つは、「何とも形容しがたい」という意味の日本語「えもいわれぬ」から派生したのではないかという説。どちらも「エモい」に通ずる感じがしますね。「エモい」とはつまり、「感情が揺さぶられて、何とも言えない気持ちになること。」とでもいうのでしょうか。

私の「エモい」と感じる瞬間を考えてみました。それは、旅行帰りの夜の高速道路です。旅行が好きなので、新型コロナが流行する前は車でどこまででも行っていました。旅行帰り、都会の環状線を抜けて山道に入った直後くらいに、後部座席でお菓子を食べながら、twiceの曲を大合唱していた友人達が、だんだんと静かになっていくので、車内のBGMの音量を少し下げ、平井堅さんの「even if」や、中西保志さんの「最後の雨」に曲を変えると、なんとも言えない、落ち着くような気持ちになり心地良さを感じます。高速道路沿いの何十kmもまっすぐに並べられた照明や、口を大きく開けて眠っている友人達がルームミラーに映っているところもまた、「エモさ」を増します。「運転変わろうか？」と聞かれても、旅行帰りの運転を絶対に譲らないのはこの心地よさを感じる為なのです。この何とも言えない心地よさが「エモい」のだと思います。旅行中のハイテンションが緩やかに下がっていくことによって感じられるものだ、勝手に思っています。おかげで家に帰っても、急激にテンションが戻り、「終わってしまった・・・。」と残念な気持ちにならずに、なんの未練もなく旅行を終えることができます。

日常の中のふとした感動を表すだけの言葉なのかもしれませんが、考えてみれば私は旅行の帰りなど、高ぶった感情を落ち着かせる時や、気持ちの整理ができず、リセットさせたい時に「エモい」という感情に頼っている気がします。

気持ちは沈んでいるより、上がっている方がいいように思いますが、時には荒ぶる感情を沈めることも必要です。良くない印象もあるような言葉ですが、感情のコントロール方法の一つとして、日常の「エモい」という感情を上手に使うことが大切だと思います。また、自分自身の感性を豊かにするきっかけにしていきたいものですね。良ければ、みなさんの「エモい」瞬間を教えてください！

